

試験研究発表(要旨)

○ 再生林の推進に向けて

ー 小容量コンテナ苗と春季下刈りの適用可能性を探る ー

森林環境部 主任研究員 内村 慶彦

本県の人工林の多くは本格的な利用期を迎えており、伐採面積は年々増加している。一方、伐採後の再生林を推進する上で、植栽及び下刈りの省力化が求められている。

近年、時期を問わず植栽でき、労働力の分散化を図ることが可能なコンテナ苗が注目されているが、このコンテナ苗は普通苗に比べて重量が重い。また、植栽後に通常5年間実施する下刈りは、夏季の炎天下での過酷な作業であり、作業負担の軽減を図る必要がある。

これらの課題を解決すべく、根鉢容量のより小さいコンテナ苗を用いた植栽試験や春季下刈りの可能性について検証を進めているので、これまでの成果を中間報告する。

○ スギ丸太を加害する穿孔性害虫とその防除について

森林環境部 研究専門員 久保 慎也

スギ丸太については年間を通じて安定供給が求められるため、伐倒丸太に被害を与える穿孔性害虫の多発する時期にも素材生産が行われている。その結果、穿孔被害を受けた丸太は安値で取引され、木材市況を低迷させる一因となっている。

穿孔性害虫については、林業関係者においては被害の多い時期などを経験的に把握していると考えますが、「いつ加害されるの?」、「伐倒丸太を山土場にどのくらい置くと加害されるの?」、「防除効果のある薬剤は?」など具体的に問われると、実証した例がないため回答が難しいところである。

今回、このような疑問に答えるため、山土場や原木市場において、スギ丸太を加害する穿孔性害虫について調査し、その防除について試験したので、その結果を報告する。

○ 新しい薬用樹木の栽培化の試み

森林環境部 森林環境部長 新原 修一

国内で使用される生薬の9割は海外からの輸入に頼っており、原産地では野生薬用植物が乱獲され、環境破壊や資源の枯渇が懸念されていることから、国内栽培による安定供給体制の整備や自給率向上が求められている。また、中山間地では未利用地の活用による地域社会の活性化も期待されている。

今回、国内で栽培されていないカギカズラ（漢方）とワダツミノキ（抗がん剤）を取り上げて、他機関と連携して共同研究を実施し、優良個体の選抜、クローン増殖技術の開発、圃場での生産効率化を目標に栽培化に取り組んだ。

本発表では、本県で実施した野生系統の収集、さし木増殖法の開発（以上カギカズラ）及び組織培養苗による圃場栽培での初期成長過程の調査（ワダツミノキ）について報告する。